

## 日韓体制下の民衆と「意味としての歴史」

— 梶村秀樹の韓国認識と歴史認識 —

姜 元 鳳

戦後日本の代表的な朝鮮史研究者である梶村秀樹は、1970～80年代の日韓関係を「日韓体制」と名づけ、同時期の韓国の経済発展を日本との垂直的分業体制を基盤とする従属的近代化と捉えた。「日韓体制」の下、朴正熙政権の強圧的低賃金政策などを通じて、韓国の民衆は劣悪な生存環境に置かれた。梶村は、そうした非人間的な韓国民衆の労働環境の上に維持されている日本社会を批判した。また彼は、朴政権の近代化思想が日本近代の国家主義的近代化思想と通底しており、その特徴はベトナム派兵を推進するなかで克明に現れていると見た。

他方、梶村は韓国の従属的近代化の矛盾に立ちむかう民衆運動とその思想に対して強い関心をよせた。とともに、梶村は日本社会の繁栄を支える韓国民衆の苦難に対して、無知であり無関心な日本社会を厳しく批判した。発展する韓国の民衆運動に比して、帝国主義的既得権に安住して自己省察の問題意識を失っていく日本社会と日本民衆に対して、総体的な危機意識を深めていくのである。

こうした日本社会の精神的危機のなかで、梶村は主体的な思想革命に貢献できる「実践的な歴史学」を模索しながら、韓国の民族史学の先駆である申采浩の生き様と研究姿勢に共鳴していく。同時に、歴史のなかの民衆の「苦難の意味」を求める咸錫憲の「意味（災）としての歴史」論に共感をよせていく。

梶村は、咸錫憲が提示した日本をも救いの対象に含める韓国民衆の「弱肉強食の世界を平和を第一の価値とする世界に逆転させ、世界を救う世界的使命」に注目しながら、「日韓体制」という先進－後進の近代的秩序の克服と先進国という既得権を捨てるような、生き方への根本的な転換を模索した。

### はじめに

1960年代初め、日本の朝鮮史研究でも、自生的に発展していく歴史、いわゆる「内在的発展」にもとづく朝鮮史像の模索が始まる。新しい研究潮流は、当時日本社会を広く覆っていた、「他律性」や「停滞性」として表象される植民地主義的な朝鮮史認識を根本的に解体しようとする熾烈な脱植民地主義的問題意識に発していた。これに対して、日本の敗戦から1950年代までの時期は、朝鮮に対する一般的無関心の時代と概括されている<sup>1)</sup>。植

民地時代の朝鮮史研究と区別しうる、日本人による新しい視角からの朝鮮史研究があまり見られなかったという意味でも、1950年代の日本は朝鮮史認識の空白時代であったといえる<sup>2)</sup>。

戦後十余年が経過しても、朝鮮に対する日本の無関心には新しい変化がなかった。その背景としては、戦後の混乱した状況ゆえに外部に目を向ける余裕がなかったこともあろうが、より根本的な要因は、植民地支配責任の意識および加害者意識自体が存在しない思想的状況にあった。このような責任意識の不在は、朝鮮に対する19世紀末以来の植民地主義的偏見によって歴史的に形成され、他者に対する自己中心的で一方通行式の対話・行動様式につながった<sup>3)</sup>。近代化のための一時的な戦術策の一環としてアジア連帯を提起しても、結局はヨーロッパ列強のようにアジア侵略を提唱することになった脱亜論の福沢諭吉を、その代表的な例として挙げることができる<sup>4)</sup>。そうした福沢的な近代化主義は、戦後日本の思想のなかでも根本的には変化せず、依然として作動していた<sup>5)</sup>。

このような日本社会の植民地主義的朝鮮認識に転機を告げた契機が、「かつての朝鮮史学のあり方を反省し、新しい方向」<sup>6)</sup>を模索する目標を掲げて1959年に発足した研究団体である「朝鮮史研究会」と、「日本人の手による、日本人の立場からの、日本人のため」の朝鮮研究をめざして1961年に発足した研究・運動団体の「日本朝鮮研究所」であった<sup>7)</sup>。

本稿では、この両方の中核的な参加者であり、戦後日本の朝鮮史研究において代表的な研究者の一人であった梶村秀樹（1935～89年）に注目する。梶村は、植民地時代の日本の朝鮮史研究者たちとは異なり、彼自身で韓国語の文献を読解できた。しかも近現代史研究の分野だけでなく、現代韓国社会の全般にわたって多数の評論を残し、韓国の政治・経済・社会および文化全般に対する強い関心を持続させた。

ところが今日では、梶村の研究に対して「西欧的近代を一つの到達点」とする近代主義的 성격とみなして批判する<sup>8)</sup>向きもある。しかし、梶村の歴史研究には、日本の「近代百年」に対する批判を伴った、脱植民地主義的・近代批判的な問題意識が貫かれていた<sup>9)</sup>。そうした問題意識を持って、彼は同時代の韓国と北朝鮮の研究成果に対して敏感に反応しながら、朝鮮半島の南北両国の歴史研究者との歴史対話を試みた。また梶村は、在日朝鮮人の人権擁護等、実践の場で活躍した社会運動家でもあった。梶村の歴史研究と実践を通じた韓国および北朝鮮との対話には、近代以来の日本の朝鮮に対する一方通行的な対話・行動に対する自覚的反省があった。

このように日本の近代百年に対する省察的な立場を堅持していた梶村は、1965年の日韓条約締結以後の韓国社会の変化を注視しながら、同時代の韓国と日本の関係性をめ

ぐって多くの批判的評論を残した。1965年以後の日韓関係を「日韓体制」<sup>10)</sup>と表現したことに現れているように、梶村は両国の関係を「経済中心の従属的分業関係」と見ていた。同時に、韓国民衆の「人間の限界」すれすれの過酷な労働環境の上に、天下太平な日本社会が維持されていると批判した。他方、梶村は韓国の従属的近代化路線の展開による諸矛盾に立ちむかった民衆運動とその思想に対して、強い関心をよせた。これと対照的に、1970年代以後、方向性をますます喪失していく日本社会に対して、梶村は総体的な危機意識を深めていった。こうした時期に、歴史における民衆の「苦難の意味」と使命を求めようとする咸錫憲の「意味（呉）としての歴史」論に出会ったことは、梶村にとってはひとつの衝撃であり、梶村は咸錫憲の歴史思想に対する認識を深化させていった。

咸錫憲の精神姿勢に学ぼうとした梶村は、「日韓体制」が投げかける意味を追求しながら、「日韓体制」の既得権に安住し、自己点検や自己克服の契機を喪失していく日本社会を告発した。韓国労働者の基本的な要求を抑圧する「日韓体制」は、安い労働力を求め、絶えず拡散していく資本主義的世界体制の「先進－後進」的秩序を象徴していた。このような意味で、「日韓体制」が表す現実や思想の克服を一生の課題としていた梶村の思想的格闘は、今日のわれわれが参照すべき重要な価値を持ち、脱近代的視角による研究や実践のために大いに示唆を与えてくれる。また梶村の歴史研究や実践は、日韓関係史を媒介にした省察的な歴史対話の先駆とも言える。今日、歴史問題が東アジアの先鋭な政治問題として浮上する状況下、梶村の思想を今日の視点で検討してみることは、実践的側面からも意義深いであろう。

以上の問題意識から、本稿は1970～80年代における梶村の韓国認識と、これと密接に連動した日本社会に対する批判的認識を検討する。そこからさらに、「日韓体制」とそこに現れる近代主義を克服しようとする困難さのなかで梶村が積極的に注目・共感した咸錫憲の歴史の意味（呉）論と、それに対する梶村の対話の仕方を省みたい。こうした検討を経ることで、梶村による植民地主義や近代に対する根源的な批判思想の一端が垣間見られるだろう。

今日では、梶村の歴史認識も「近代主義的」として批判されている。しかし、当時と比べて、東アジア各国の社会は近代および近代主義をどれほど相対化できているだろうか。近代を克服しうる実践と思想の両面で、梶村の時点と質的に異なる蓄積をなしているかと問われると、容易には答えられないのが今日の実情だろう。当時も今日も、本質的には変わらない近代の矛盾との直面のただなかで、1970～80年代に「日韓体制」に立ちむかった梶村の思想的格闘は、今日の視点からも十分に吟味する価値があると考えられる。

このような観点から、梶村の同時代韓国に対する分析を系統的に追跡、検討した研究は、管見の限り見当たらない。一人の歴史家の史学史的な位置を測ろうとするときには、彼の歴史叙述が今日においてどれだけ評価に耐えうるかという研究史的な評価だけでなく、彼の歴史叙述を生み出した同時代認識までふまえた検討が欠かせない。ならば、梶村に関する史学史的な研究は、なお多くの未検討の部分を残していることになる。本稿は、そうした欠をいささかなりとも補うことになるだろう。

### 1 朴正熙政権と「近代化された矛盾」

1970～80年代の梶村の韓国認識を探る前に、まず1960年代における梶村の韓国認識を簡単に検討する。1960年代半ば以後の日韓関係に対する梶村の認識は、「日本の韓国進出・韓国の隷属化」という言葉に集約されている。当時、梶村が執筆した論文の題目、すなわち「『不正蓄財処理問題』と南朝鮮の隷属的独占資本」、『日韓経済協力』の本質、「従属経済関係へ進む、政治的介入の深化へ」等からうかがえるように、彼は韓国経済に、日本との垂直分業的關係におかれた従属的な経済の非民衆的性格を見た<sup>11)</sup>。なかんずく1967年の論文「韓国経済の構造と現局面」では、「戦前36年間の日本の植民地支配」と「戦後20年間のアメリカの支配政策の歴史的所産」である植民地的経済としての性格を摘出している<sup>12)</sup>。

日韓条約締結以後、急速に密接の度を深めた日韓の経済関係は、1970年代には、梶村が「日韓体制」と表現したように、一体化された経済関係を形成するようになる。では梶村は「日韓体制」をどのように認識していたのだろうか。1960年代、日本資本主義の立場からすれば、韓国は反共の最前線にあり、しかも安い労働力の供給先として、経済・軍事両面の要求をすべて充足させられる下位パートナーであった。1970年代、日本資本の直接投資を媒介とする経済関係のさらなる密接化は、韓国経済に対する日本の影響力を増大させ、一体化された経済単位の形成をさらに促した。もちろん、こうした「日韓体制」の完成には、朴正熙政権の「外資依存型工業化政策」があり、日本資本の安定的投資を誘導するために韓国労働者の賃金問題などの諸般要求を封殺する強圧的な労働政策があった。梶村は、朴政権の従属的近代化政策の生々しい実状とそれに対する民衆の抵抗を紹介した<sup>13)</sup>。しかし、朴政権はひたすらムチだけによって国民の動員を果たせたわけではなかった。現在の苦痛を耐え抜き、近代化が達成されれば、アメリカや日本のような自由民主主義を享有できるという「近代化のビジョン」を提示していた<sup>14)</sup>。

梶村は70年代に朴政権が提示した大衆福祉国家のビジョンについて、将来を約束できない青写真であり、幻想にすぎないと結論づけた。外部の衝撃に対して脆弱な対外依存の従属経済の不安定性からみて、大衆福祉国家に到達するために必要な経済成長の恒常的な安定性の確保自体が幻想的期待にすぎないというのである<sup>15)</sup>。朴政権に対するこのような批判的な認識にもかかわらず、当時の日本社会に流布していた韓国に対する暗黒社会的イメージや朴政権即時崩壊論に対して、梶村は慎重な態度を維持している。梶村の見立てによれば、当時日本の朴政権に対する批判的な論調は、「絶対的にさえ窮乏化している民衆」の上に君臨する公職者の不正・腐敗、それに対する民衆の不満を抑圧する「恐るべきゲバルト装置と情報政治」の朴政権、それを背後から支援するアメリカと日本、という図式をとっていた<sup>16)</sup>。このような韓国に対する単純で劇的なイメージにもとづいて、米・日の朴政権に対する援助を遮断し、国際世論を通じて孤立させてしまえば、独裁政権は即時崩壊して民衆は歓呼の声をあげながら立ち上がる、という類の単純な展望が流布されもした。

今日の国際問題認識にもよく見られる、外部的衝撃による現状打破論に対して、梶村は韓国民衆の主体的な選択と真の国際連帯を求める立場から、「変革のプロセスが他律的に進行」することを前提とした議論に疑問を投げかけた<sup>17)</sup>。韓国近代史において、甲申政変と甲午農民戦争を通じた外勢の直接的、間接的な介入が、韓国近代史の内在的発展の流れに複雑性と苦難を増大させたことを強調してきた梶村としては、当然の問題提起だろう<sup>18)</sup>。

しかし、独裁政権即時崩壊論に対する梶村の慎重な態度には、韓国民衆の主体的な選択に対する尊重があっただけではない。朴政権が主導する従属的近代化路線による経済発展と社会意識の変化が、しっかりと見据えられていた。「千里馬のスピードで発展する社会主義北朝鮮」と対比される「腐敗と停滞の南朝鮮資本主義」という1950年代の日本における図式的な韓国認識は、すでに過去のものとなりつつあった。韓国経済は、客観的な物量の指標においても無視できないほどの水準に到達していた。1981年度に到達目標とした輸出100億ドルを1977年度という早期に達成するほど圧縮的な成長を見せたため、朴政権崩壊前夜論は色褪せるしかなかった。梶村の発言を見よう。

かつて五〇年代には、私たちは南北朝鮮の経済を比較するのに、単純にGNP（国民総生産）指標を用いてきた。千里馬のスピードで発展する社会主義北朝鮮と腐敗と停滞の南朝鮮資本主義との対照は、それだけで一目瞭然であり、理屈にも合ってい



るように思われた。<sup>19)</sup>

なるほど五〇年代には、近代化という基準そのものによってしても南を批判することができた。物量的な指標にてらしても、北の南に対する優位を実証することはたやすいことであった。だが、いまや近代化の物量的指標にしがみついていたのでは、もはや南を批判しきることにはできないところへ来ている。<sup>20)</sup>

このような急速な経済成長が、民衆のあいだに生活上昇の期待感を醸成したのも事実であった。たとえば1967年から上映され、近代化の発展像を宣伝した映画『八道江山』シリーズ<sup>21)</sup>が、国策広報映画であるにもかかわらず広く人気を博したという事実も、民衆の期待感の一端を示しているといえよう。「高速道路や高層ビルの建設、新しい工業製品の登場」を通じて、民衆が自身の目で直接確認できる変化が未来に対する期待へとつながったことは否定できない<sup>22)</sup>。

しかし、近代批判の視角が広がっていた1970年代日本の思想潮流においては、南北韓社会に対する評価の基準として、1950年代式の生産力（GNP）にもとづいた比較をしたのでは、すでにラディカル（radical）な批判とはなりえなかった。やはり梶村も「高度成長」の本質および実状に批判の重点を置いていた。梶村は、朴政権の政策がもたらした物量的基準だけで評価される近代化主義であり、西欧や日本の国家を目標として物理的強制を動員してがむしゃらに突進するところに朴政権のリアルな姿があると結論づけている。また、近代化が人間性の解体を強要する側面に着目し、現在の韓国民衆の酷薄な生存条件は、前近代社会の封建的な矛盾に比しても決して軽いものではないと評した<sup>23)</sup>。

このように韓国政府の近代化政策とその志向を分析しながら、梶村は、朴政権が主導する近代化路線の原型ともいえる明治維新以後の日本近代に考えを致さざるをえなかった。

ここで、いやおうなしに気づくことは、朴政権が描いてみせる軌跡が、近代日本百余年の軌跡と驚くほど良く似たものだということだ。チープ・レーバーに依拠した、加工貿易型資本主義化という実態面から、それに与える「先進」国模倣的意味づけのしかたまで含めて<sup>24)</sup>

しかし、加工貿易型資本主義という点では日本と韓国は類似するものの、植民地とい

う矛盾緩和の排出口を持った日本との対比では、矛盾のはけ口がない韓国民衆の生き様  
はさらに凄惨にならざるをえないとも梶村は考えていた。こうした朴政権の近代化路線  
に対して、梶村は「超エコノミック・アニマル」的価値観であり、政治的レベルではこ  
れを「朴体制」<sup>25)</sup>と呼ぶことができると朴政権を批判している。

## 2 自己点検の契機としての韓国民衆

1960年代前半、日韓会談反対闘争が展開された際、日本の革新運動の主な関心は、日  
韓の国交正常化が日・米・韓の軍事的連携を強め、結局は北朝鮮・中・ソとの軍事的緊張  
を高めるのではないかという軍事・安保の問題にあった。日本の過去の植民地支配に対  
する反省や日本社会の在日朝鮮人差別に対する問題認識は希薄であった。そうしたなか  
で、韓国に対する蔑視思想や在日朝鮮人に対する差別が体現する戦後日本社会の植民地  
主義の問題と植民地支配責任を提起した、梶村をはじめとする日本朝鮮研究所の立場<sup>26)</sup>  
は、「植民地支配の反省という契機を持たない一般革新勢力の運動の中から孤立」<sup>27)</sup>して  
いた。日本社会の植民地支配責任をいち早く提起した梶村だったが、当時は在日朝鮮人  
や韓国社会に対する認識は抽象的な段階にとどまり具体的ではなかったと後に告白して  
いる<sup>28)</sup>。1968年2月に発生した金嬉老事件<sup>29)</sup>を通じて強烈な衝撃を受けた梶村は、この  
事件を契機に朝鮮史研究においても内在的発展を「純粹化して理想化」した韓国の文化  
や人間のイメージから離れて、日本社会の在日朝鮮人が「人間解体」的な状況からどれ  
ほど苦痛を受けているかを知ることになったと言う<sup>30)</sup>。

梶村は1971年の講演で、1970年代を次のように展望していた。

七〇年の一一月、ソウル東大門平和市場の労働者、保税加工貿易製品として日本に  
も大量に輸入されている安い背広などの製造のため、日韓体制下の現実のまさに最  
底辺で、最低生活もなりたちえないような賃金条件の下で、一日一五時間以上の労  
働を強いられている南朝鮮の労働者、<sup>チョンテイル</sup>全泰壹氏が、衝撃的な焼身自殺という行動に  
よってその状況をつくりだしたすべてを告発した。それを受けとめるなかで、南朝  
鮮の学生運動は新たな質的な飛躍を遂げている。<sup>31)</sup>

「日韓体制」下の韓国民衆に対する梶村の注目は、1970年に起きた全泰壹事件の衝撃を  
通じて本格化する。梶村は1971年の評論「全泰壹氏の焼身自殺の意味は何か？」で、「人

間として最小限の要求」すら充足できない韓国の当時の労働環境を紹介し、告発している。またこの事件と関連する学生たちの活発な人権擁護活動に言及しながら、学生たちの動向は「70年代韓国学生運動の新しい展開」を告げると予測した。1960年代の韓国学生運動に観念的で抽象的な面があったのと比較して、「学生と労働者の連帯」の兆しを見てとり、韓国民衆運動の70年代に対する期待と展望を表明した<sup>32)</sup>。

では「人間として最小限の要求」すら充足しえない労働環境に、梶村は何を見たのだろうか。それは、肉体を損傷するほど酷使される低賃金労働者の生き様が見せる近代化の実状であった。近代化を通じた生き様の変化は、前近代的な社会（農村社会）のなかで貧しいながらも比較的安定的に暮らしていた段階から、将来に対する絶えまない不安と目まぐるしく走り回る生活への変貌を意味した<sup>33)</sup>。朴政権の高度経済成長政策がつくりだした民衆の生存条件について、梶村は次のように表現している。

チープ・レーバーを唯一の武器とする輸出ドライブ政策が、いかに凄惨な低賃金強労働を強いているか [中略] 同じ外貨獲得増額大政策はまた、ベトナム派兵・「人力輸出」からキーセン観光に至るまでの修羅場に大衆を駆り立ててもいる。工業化＝国際収支の均衡という一点に目標をしぼっての政策の強行は、単に物質的犠牲を大衆に強要するだけでなく、人間性の荒廃を強いるものでもあるのである。これが朴政権が目的意識的につくり出したところの、南朝鮮民衆の生存条件なのである。<sup>34)</sup>

1970年代の韓国における高度成長の裏面には、労働者の肉体的損傷とともに人間性の荒廃を伴う過酷な生存条件が植えつけられていた。「恐ろしく急な産業構造の変容」を経験した「日韓体制」の20余年を、梶村は「人間として耐えうるギリギリ」の労働条件をとまなう「矛盾の高度成長」であると喝破した<sup>35)</sup>。

他方で、この状況に抗する1970～80年代の韓国民衆運動を、梶村はどう見ていたのだろうか。前述したように梶村は、1970年の全泰壺事件を契機として、知識人・学生と民衆運動とがひとつに結ばれる兆しに注目し始めた。梶村は1970年代、それまでは学生がほぼ唯一の民主化運動の実行力であったことに比して、70年代半ばになると参加層が著しく厚くなってきたと見ていた。しかし、依然として運動参加者の大半は学生・知識人等に限定されていると分析した。そのため、朴政権が民衆の台頭を巧妙に遮断する事態に対して、運動勢力は民主化運動と「民衆との回路の奪還」に集中すべきだと提言してもいる<sup>36)</sup>。



知識人と学生に限定された70年代の民主化運動は、「光州（1980年光州民衆抗争－姜補足）を経て」80年代半ばに至ると、独自の運動主体である労働運動等の民衆運動の登場とともに、軍事政権と対決構図を形成するほどに飛躍的な変貌を遂げた<sup>37)</sup>。周知のように80年代半ば以降、韓国民衆運動は1987年6月の民主化運動を通じて潜在的な力量を開花させ、政府の弾圧を乗り越えて最高潮に達する<sup>38)</sup>。新たな局面が開かれるなか、さらに同年7～8月には全国的に2500余件に達する大規模な労働争議が起こった<sup>39)</sup>。この一連の過程で、「日韓体制」のもとで抑圧されていた民衆のあらゆる声が噴出し始める。

以上のように、70～80年代の「日韓体制」のもとで、梶村は経済成長の裏面に隠された過酷な生存環境に追い込まれる民衆と彼らの抵抗を目撃した。同時に梶村は、朴政権の従属的近代化路線のなかに覆われている暴力的な近代日本の影と韓国民衆の苦難を凝視しながら、自身と日本社会を省察する「自己点検の契機」として韓国を研究・実践する<sup>40)</sup>。

帝国主義的イデオロギーの中にひたっているということを自分自身が意識し自覚し、絶えず考える、そういう契機として朝鮮問題はある。<sup>41)</sup>

「日韓体制」に対する梶村の同時代的問題意識は、日本の明治維新と同じ類型の近代国家を志向した甲申政変の開化派に対する批判的研究につながっていた。また、そうした視角は民衆を啓蒙と動員の客体と見なす南と北の政治体制に対する批判へと拡張された<sup>42)</sup>。1970年、東学運動史と関連する翻訳書の解説を通して、梶村は「東学運動を朝鮮民衆の近代の出発点」と見て、今日「近代世界の頹廢の波」を集中的に浴びている韓国民衆運動が東学を乗り越えて近代克服の課題を背負っていると位置づけた<sup>43)</sup>。

梶村は1977年、論文「韓国・朴体制の光と影」において、日韓の経済関係の性格を次のように規定した。

今日における「侵略」のありようは、総体としての国民経済が総体としての国民経済の上に立ち、相手側の国民生産力をその自発性をふくめて総動員するという形態をとって現象しつつあるのである。これを「経団連」的なあけすけな表現をもっていえば、「技術・知識集約産業と労働集約産業との間の高度に発達した国際分業」ということになる。<sup>44)</sup>

すなわち、韓国の国民生産力が総動員され日本経済を支えているというのである。このような日韓の「高度に発達した国際分業」関係は、日本社会とその市民を、韓国民衆を踏みつける位置に追い立てる構造でもあった。こうした構造的現実について鈍感な日本社会を告発しながら、梶村は日本社会が近代以来、苦難の韓国民衆の犠牲によって成り立っている構図を、現在の問題であり自身の問題として自覚すべきであると警鐘を鳴らす。そのためには、韓国の労働者が一日に何時間働いていて、どのような生活をしているのかといった「現象的な事実から」始めて、なぜこのような状況に置かれているのかという「本質にまで」踏み込む方法が必要であると述べる<sup>45)</sup>。韓国の労働者が置かれた現実に対する具体的な理解から始めて、日韓の国際分業関係の重層性とそこでの日本側の責任を自覚するよう期待したのである。しかし実際には、「日韓体制」の深化によって、両社会のあいだに、直截的な権力関係としては把握しにくいような巧妙さと複雑な径路をもった構造が生まれた。その結果、日本社会の無知と無関心とがいっそう増幅されることについて、梶村はすでに1970年頃から重大な「思想的危機」と見なし、次のように警告を発していた。

そのおぼれの一切を拒否していると、簡単にいえるかどうか？ 我々のそういう現在の存在に無自覚であるとする、僕らの意識はそのように規定されているはずだ、と考えなければいけないことになる。在日朝鮮人の戦後二五年間を、我々が無関心のままに過ごしてきたことも、こういう意識のありようと無関係ではない、と考えなければいけないことになる。重層構造が一層巧妙・間接的になっている分だけ、無自覚性が一層深まっていることは、むしろもって容易ならぬ思想的危機だと言っても良い。<sup>46)</sup>

一方、北朝鮮に対する梶村の認識はどのようなものだったのか。彼は1960年代から、ある側面では韓国以上に、歴史研究を始めとする北朝鮮の政治・社会の動向に強い関心を払っていた<sup>47)</sup>。しかし、70年代に入り北朝鮮が経済統計を一切公表しなくなると、日本の研究者たちは「金日成演説などで、断片的に明らかにされた数字を寄せ集めてジグソパズルのように全体像を組み立てるしか」なかった。ジグソパズルを通じて描かれた北朝鮮の国民像からは、「ひたすら生産し学習する人びと」しか見いだせない<sup>48)</sup>ほどに、北朝鮮関連の資料を入手することは困難になっていた。梶村も同様に、北朝鮮に暮らす民衆の心情を把握することは困難であると吐露しながら、想像力をはたらかせようとして

も根拠となる資料が絶対的に不足している現実と言及していた<sup>49)</sup>。1960年代の北朝鮮における個人崇拜の強化、社会の多様性の喪失と情報の極端な統制は、北朝鮮民衆の生き様の把握を困難にさせた。梶村は、硬直化する北朝鮮を非難する日本社会の論調に対して、硬直化による弊害の存在自体は否定しなかったが、それよりもむしろ植民地支配に由来する朝鮮半島の南北分断と対立の過程で、北朝鮮における体制の成立に日本がはたした歴史的・現在の役割を見据えた主体的な「民族的責任の観点」<sup>50)</sup>が前提されるべきことを強調した。韓国を認識する際に現れた梶村の「自己点検の契機」という対象把握の視角は、北朝鮮認識についても確認できる。

### 3 日本社会の価値観と民衆の課題

1970年代の日本社会では、安価な韓国産輸入衣類が何の疑問も抱かれずに普及していた。だがその裏面には、全泰壺事件が物語るように、韓国の極限的な労働環境で低賃金を強要される労働者がいた。こうした国際的規模の犠牲と差別構造の上に日本社会の日常生活があることを、梶村は強く自覚していた<sup>51)</sup>。また梶村は、労働者階級の国境を越えた国際連帯という理念も色あせてしまい、日本の労働者や労働組合が帝国主義的既得権に安住し、韓国労働者の苦痛を同じ労働者として共感できないところまで来てしまったことを告発していた<sup>52)</sup>。

こうしたなかで梶村は、前述した独裁政権への安易な批判論に対しても、その問題点を指摘している。韓国民衆の犠牲の上に繁栄を謳歌する日本資本主義体制のなかに安住し、自身を直視できない限り、どのような朴政権批判も、他人の目にある屑は見えるのに自分の目の中の丸太には気づかないようなものだとして梶村には映った。韓国社会と日本社会とを同時に視野におさめ、「日韓体制」全体を捉えられないような独裁政権批判は、梶村にとっては自己欺瞞にすぎなかった。それゆえ、独裁政権下の韓国に対する日本社会の同情心や、韓国との対比で戦後日本の「自由と民主主義」を称揚するような矜持の持ち方は、もっともナンセンスな不条理として梶村の眼に映じざるをえなかった<sup>53)</sup>。ここで梶村は、日本の近代百年に対する「全否定」と近代主義を克服する方途を模索することこそが、矛盾を抱えた日韓関係の根本的解決の道であると提示する。

我々の立脚点は、近代日本百年の軌跡をいさぎよく全否定するとともに、その到達点としてある現在の「自由と民主主義」のいっそう凄惨な偽瞞性をみることができ

る、近代化主義をこえんとする立脚点でなければならないのである。私たちは当面、そのことを南朝鮮の民衆の悪戦苦闘の中で獲得された感覚から、学ばなければならないと思われる。<sup>54)</sup>

韓国民衆の悪戦苦闘に、梶村は何を見たのだろうか。韓国のベトナム派兵からも、梶村は日本の近代百年の醜悪さを見せつけられることになる。1974年に発表された論文「ベトナム派兵の傷痕」において、梶村はベトナムへの韓国軍派兵を正当化する朴政権の論理のうちに「祖国の近代化」と「国威宣揚」の意志を見出すだけでなく、強烈な「先進-後進」意識を背景にベトナムを利用してアジアから脱して「先進国」の隊列に入ろうとする欲望をも読み取っている<sup>55)</sup>。しかし梶村は同時にそこで、他民族の苦難などものともせずに矛盾の排出口を求めるもっとも破廉恥な手本を韓国に提供した日本の近代百年に言及せざるをえなかった。

近代百年の日本が作り出してきた思想とより二つではないか。アジアを脱し、アジアを踏台にして独り「先進」の列に成り上ろうとした福沢諭吉の「脱亜論」の相似形ではないか？客観条件がちがうだけで。〔中略〕日本の歴史的責任は過去のものではないのである。ベトナム派兵の思想は、近代日本を支えてきた思想の醜悪さを再版してみせつけてくれるものなのだ。<sup>56)</sup>

梶村にとって、近代日本の思想はベトナム派兵の思想のうちに依然として生きていた。しかも、朝鮮戦争とベトナム戦争という二つのアジアの熱戦を機とする特需を通じて成長していった戦後日本の実態は、近代的世界体制の構造的残酷性とその主役の一つである日本国家の不道徳性を如実に証明していた。

私が、るる述べてきたのも、日本-韓国-ベトナムという軸に沿って、あたかも自然な経済現象のように思われている構造を支配する世界体制が、いかほどまでの残酷さを強いているかを、具体的に浮きぼりするために、ほかならない。日本国家の不道徳さがどれほどまでのものかを、自覚するためにほかならない。<sup>57)</sup>

こうした認識を下敷きとして、梶村は1975年、論文「日韓条約体制一〇年の帰結」を通じて、日本民衆の社会意識が深刻に悪化していると危機感を露わにする。日韓関係に対

する10年前の批判意識と比較しても、「帝国主義にマヒ」してしまい、「日韓体制」に対して意味ある批判が展開されていない。それどころか、近代主義的感覚から、「朴政権は生産力向上をそれなりによく組織」しているとの見直し論すら台頭していることを憂えた。そして、こうした風潮を許す日本の批判的思想の「不徹底性」に言及しながら、「日韓体制」の現実を民衆が実感して本質を把握できるような思想の創出を緊急な課題として挙げている<sup>58)</sup>。

「日韓体制」の実状に対する無知と批判意識の希薄化、韓国民衆の苦難に対する無関心等に直面しながら、梶村はこの問題をより根源的に掘り下げていった。「日本政府の韓国へのコミットをやめさせる。経済癒着を断て」という一般的スローガンでは、すでに強く一体化した経済体制の次元にまで到達している「日韓体制」への根本的な批判にはならないと梶村は見た。必要なのは、「日本の国家、独占資本の総路線、日本独占資本の国内国外にまたがる支配体制とトータルに対決する長期的な展望」であった<sup>59)</sup>。

韓国という従属的パートナーの存在を必要とし、垂直分業体制を支えている韓国民衆の犠牲の上でのみ存立可能な日本の資本主義と国家体制に対する根本的な対決を梶村は模索していた。ある意味では第三世界民衆の苦難を必要条件とする日本社会の生き方自体に対するパラダイム転換を念頭においたものであるとも言えよう。そこで梶村の批判の矛先は、日本の民衆にもむかった。先進国日本社会の民衆が「すでに獲得して既得権と思いこんでいる何物かを、失う覚悟」、すなわち従属的経済体制下の韓国民衆の苦難があるからこそ成立する既得権を放棄する覚悟がない限り、日韓の「民衆的連帯」は困難であるばかりか、帝国主義的無関心からも逃れられないと指摘した<sup>60)</sup>。日本の労働組合が韓国労働者の現実を無視して「資本と共犯関係」を結んでいる状況に現れていたように<sup>61)</sup>、日本社会はすでにこの構造のなかで自らの位置を韓国と比較・確認して、その地位を安心して享受するようになっていた。

日本社会と民衆が享有する既得権、すなわち帝国主義体制について、梶村はどのように認識していたのだろうか。

根なしぐさの「繁栄」、脆弱な浪費経済、せわしない精神的消耗—そんな生き方は、いやおうなしに通用しなくなり、生き方を変えることが求められる。帝国主義の内側に住むことになれたしんで、そうしたラジカルな問題意識を摩滅させるほどに、われわれはボケていないだろうか。〔中略〕おそらく、南朝鮮のすくなくとも金芝河には<sup>62)</sup>、すでに腐臭を発しはじめている戦後日本的生き方の問題性は、よりはっき



りと見えているだろう。<sup>63)</sup>

梶村にとり、既得権に安住する日本社会は「腐臭」を放つも同然に見えた。人間の限界を試すような韓国の労働環境の上で「天下泰平を謳歌する」<sup>64)</sup>日本社会、生き方をめぐる根元的な問題意識が育ちにくく、自己点検の契機を喪失した日本の思想風土、それらを厳しく問い質す深刻な思いがそこに見て取れる。

こうした問題意識の深化とともに、梶村の眼には、1970年代以降、民衆運動の次元でも日韓の差がますます鮮明に映った。70年代、韓国では民衆運動が高揚期に入っていたが、これとは対照的に、日本では沈滞の一途をたどっていた。韓国の民衆運動が知識人・学生中心の運動から、光州民衆抗争を経て基層民衆が運動の中心となっていく道を行んだのと同じ時期に、日本では何事もなく「大衆意識は安穩」であり、知識人・民衆と支配層の緊張関係は絶えて久しくなっていた。とりわけ知識人の批判精神の放棄と大量転向という趨勢が、支配層と民衆の一体化に大きな影響を与えたことを、梶村は深刻に受けとめた<sup>65)</sup>。

80年代に入り、日本の民衆運動と韓国の民衆運動のあいだには、さらに大きな格差が生じた。日本では、経済的繁栄のなかで既成秩序への抵抗性を喪失し、一種の転向ともいえる状態のなかで、著名な知識人すら問題意識を喪失していった。梶村のいう「転向」とは、単に理念的側面だけを語ったものではない。自己が属する社会に対する批判的視覚、自己点検の作業に対する諦めを象徴していた。このような現象は、当時の韓国と比べたとき、さらに鮮明に認識された<sup>66)</sup>。

やがて梶村は、日本の「戦後民主主義」自体に対する疑問を抱きはじめていた。帝国主義的な既得権に安住して問題意識を喪失し、既存の国家と社会体制に対する「抵抗権」を行使した経験がほとんどなかった点に言及しながら<sup>67)</sup>、国家を相対化する経験と視点の不在を指摘した<sup>68)</sup>。そこから、日本社会に広範に浸透している国家至上主義に比べると、韓国現代史では「現存国家を過渡的なものとして相対化する視点」と経験が存在すると梶村は見ている<sup>69)</sup>。このような見解からは、当時の韓国社会に対する認識の正確さの可否はさしおいても、梶村の日本社会に対する問題意識が韓国近現代史研究に投影され、それによって深まっていたことがうかがえよう。梶村はまた、日本人と比べて国家と自己の関係を相対化している在日朝鮮人（定住外国人）との共生の経験を通じて、多くのことを学べると語っている<sup>70)</sup>。

#### 4 意味喪失時代の歴史認識

では梶村は、日本社会の思想的停滞状況を打開するカギを、どこに求めたのだろうか。80年代の日本では、従来社会批判の方法的根拠となっていたマルクス主義的歴史観が旧時代的思想として批判の集中砲火を浴びていた。しかし梶村は、この時期にはむしろいっそうマルクス主義的歴史観を擁護した。もちろん、梶村は現存社会主義国家に対してすでに批判的立場に立っており、単線的な発展段階論に囚われてもいなかった。梶村が堅持しようとしたものは、マルクス主義的社会分析の枠が擁した資本主義的近代に対する批判と弱者の擁護にあった。梶村は前述したように、自己点検の契機と志向性を失っていく日本社会のなかで、進歩に対する信頼と実践的な力を持つ「本当の意味の歴史学」が再建されなければならないと主張した<sup>71)</sup>。

このような脈絡で、梶村が1960年代初めの日本朝鮮研究所時代から一貫して、日本社会の植民地主義的な韓国認識や在日朝鮮人の人権問題と格闘しながら、研究者と運動家という二つの人生を並行させた結果、彼の文章にもその特徴が色濃く表れていることにあらためて注意を喚起したい。

学者ですらない、といって政治運動という意味での運動家ではないという領域で——できるだけ朝鮮人と真の意味で共に歩む作業を続けていくつもりでありまして〔以下略〕<sup>72)</sup>

梶村の実践運動家としての問題意識と視点は、早くから、韓国の近代民族史学の先駆ともいえる申采浩に対する注目につながった。申采浩への注目は、申采浩がアカデミーの世界とは異なる独立運動の現場に身を置いて歴史研究をしたためであり、植民地的「状況に正面から向い合い通したもっとも誠実な革命的民族主義的インテリゲンチヤ」だったからであった<sup>73)</sup>。歴史研究者でありながら運動家としての人生を生きた梶村にとって、申采浩はひとつの理想型とも言えた。「本当の意味の歴史学」を再建するために、梶村にとって批判的に継承すべき価値があるのは、日本の実証史学ではなく、申采浩の民族独立のための「民族史学」であった<sup>74)</sup>。

梶村は1977年、論文「日本帝国主義の問題」で、植民地の犠牲を無視して、日本の近代百年を文明の進歩として自画自賛するような日本社会の支配的歴史認識に強い疑問を表明した。また、進歩的な日本の歴史学界が帝国主義を把握するために歴史方法論をい

かに精密化しても、国民の歴史意識の変革に実際に力にならなければ意味がないと辛辣に批判している。アカデミーのなかでしか有効でないような方法論の精密化では虚しいと自省し、日本社会全体を視野に入れた「歴史の意味を私たちがどううけとめているかという、いわばトータルな思想の問題」を重視した<sup>75)</sup>。

日韓強制併合について「弱肉強食の時代だからやむを得なかったのではないのか」とか、「そんな風に日本が攻め込んでしまったのは朝鮮人がだらしがなかったからだ。かわいそうだが仕方がない」という反応<sup>76)</sup>が大勢を占めていた当時の若者たちの歴史認識を見ながら、梶村は帝国主義的な近代日本の歴史を相対化・克服できずにいる日本社会を痛切に認識せざるをえなかった。

梶村は、前述の論文「日本帝国主義の問題」を通じて、歴史を見る際に主体的な意味の領域を重視するよう提唱していた。共通の法則的理解から出発しても、歴史に対する評価および実践の課題と関連する具体的な歴史像は、それぞれ主体的であることを説明しながら、重視すべきはそうした主体的な歴史の意味の領域であると捉えた。

たとえば梶村は、甲申政変の指導者・金玉均を高く評価した60年代北朝鮮の歴史認識を紹介しながら、そこには、内在的発展を強調する歴史像と朝鮮史研究における講座派的視角の影響、すなわちアジア・朝鮮の「特殊性＝遅れ」を強調する傾向に対する批判があったと指摘している。ここから梶村は、マルクス主義歴史学が永遠不変の真理や唯一的な「科学的歴史像」に硬直化するものではなく、状況的な真理であることを再度教えてくれていると語る。すなわち、直面した状況から主体がとる立場により、歴史の意味は異なって解釈される。これは、歴史的事実に対する厳密な実証・分析を前提にした上で、歴史を見る主体の「意味の領域」が存在することを論じたものである<sup>77)</sup>。

こうした「意味としての歴史」は、マルクス主義的な歴史研究にだけ見られるものではなかった。梶村は1984年の論文「歴史と文学」で、「意味としての歴史」が1960年代の日韓会談反対闘争に触発された韓国の「民族史学」の見直しからも見出すことができると指摘する。また事大主義に対抗して民族の主体性を回復しようとする申采浩の「事実の意味ある体系的認識」が見せる迫力に比べて、「些末主義」に陥っている日本の歴史研究が提示する歴史像では、「意味としての歴史」の次元で社会的共感を獲得する程度において、申采浩を到底凌駕できないと語った<sup>78)</sup>。

なお、同時期に申采浩に注目したのは梶村だけではなかった。宮嶋博史は、解放後の韓国の歴史研究を鳥瞰した論文で、申采浩の歴史研究を「民族史学」の先駆と位置づけ、申采浩の思想の基底部に、奴隷状態の屈辱のなかでも依然として存在する「民族と民衆

に対する深い信頼感」を見てとっている<sup>79)</sup>。申采浩の「民族と民衆に対する信頼感」については、梶村もまた深い共感をよせており、知識人が民衆から学ぶとともに民衆の感性に究極的価値の根拠を置くべきだと考えていた<sup>80)</sup>。

このように民衆とともに歩もうと志す梶村にとり、咸錫憲の『意味から見た韓国歴史(뜻으로 본 한국역사)』<sup>81)</sup>との出会いは、それまでにない衝撃として経験された。咸錫憲の歴史観は、そもそも1934～35年に雑誌『聖書朝鮮』に連載された「聖書の立場で見た朝鮮歴史」で初めてその基本的な視角が登場し、連載内容は1950年に刊行された『聖書の立場で見た韓国歴史』<sup>82)</sup>に収録された。咸錫憲は、韓国民衆の歴史を「苦難の歴史」と見る。しかし、ただ苦難だけの歴史ではない。もともと苦難のなかに意味(뜻)があるという聖書の教えに依拠して、韓国民衆の苦難の歴史に意味と使命を求めようとする咸錫憲の歴史認識に、梶村は衝撃的な感動を覚えた。

この苦難の意味は、単に一民族に限定されることなく、世界史的意義を持つ<sup>83)</sup>。「日韓体制」を血と涙で支えていた韓国民衆と、咸錫憲が見た世界史的意味を持つ民衆の苦難とが、梶村のなかでオーバーラップ(overlap)しながら、強烈なメッセージを与えたと考えられる。前述した金玉均評価と申采浩の「民族史学」の例を通じて現れた歴史における「意味の領域」に関する梶村の言及も、咸錫憲の影響といえる。一方、咸錫憲はこうした苦難の世界史的意味として、「歴史の下水溝」という表現を用いる。

それが神の摂理でもある。〔中略〕世界の不義をひきうけることによって人類の歴史を道徳的にいっそう高めるしごとだ。それが歴史の下水溝ではないか？<sup>84)</sup>

梶村は、このように世界の不義を背負った「世界の下水口」である韓国と、第三世界国家である韓国の状況とをオーバーラップさせて見ていた。同時に、韓国を「世界の下水口」の役割に追い込んだ日本社会を直視すべきであると訴えた。1980年、韓国が激動のただなかにある時期に執筆された梶村の次の文章を見よう。

「韓国は世界の不義の結果を負う世界の下水口だ」というのである。比喩は衝撃的だが、しかしこの認識は、われわれの歴史科学的な事実認識と一致していると思う。現在の韓国民衆の負っているもろもろの不条理は、確かに戦後の両体制間矛盾と、資本主義世界の中での「先進国」＝「後進国」間矛盾に大きく条件づけられているのである。アメリカや日本の高度に発達した資本主義経済の繁栄と、「豊かな生活」が生

み出す矛盾が、第三世界全般、とりわけ限界地域としての韓国の民衆にしわよせされている構造があることを直視しなければならない。<sup>85)</sup>

さらに、こうした韓国民衆の苦難とはまた別の次元と意味から、日本社会が直面する苦難と課題を語っている。それは韓国民衆の苦難の上にあぐらをかいている日本社会の生き方に対する告発と、それを克服するための真摯な問いでもあった。

そうした体制の枠内にとらえこまれていることが、私たちの苦難なのである。「下水口」に自からが発生させた毒素を流しこみ続けているのが、私たちだ。毒素を「洗い清める役割」を韓国の民衆に委ねておいてよいのか？ 大量の毒素を発散させる私たちの生活のありよう全体を問わないでよいのか？<sup>86)</sup>

このように、韓国民衆の苦難とはまた異なる状況から、異なる次元の「苦難＝試験問題」に直面している日本民衆は、韓国民衆の「苦難の荷を能動的に背負ってきた精神のありよう」から学ぶべきであるという<sup>87)</sup>。すなわち、毒素が発生させて韓国へ流している自己の位置が持つ意味を自覚して、それを克服するための道を主体的に探すべきという意味である。

これは梶村が日本民衆に正面から投げかけた問題提起だったが、1960年代の梶村が堅持していた、いわゆる歴史発展の主体は民衆であるとするマルクス主義的な「人民」観などとは異なる視野とニュアンスが垣間見える。梶村の民衆観に、咸錫憲的な民衆観が加味されたとも考えられるだろう。

このように梶村が解釈した日本社会の苦難と試練は、今日、韓国を含めたいわゆる先進国の領域に到達した国々と未来の先進国を志向するすべての国々が置かれた苦難と試練かもしれない。当時の梶村は「帝国主義内部の人間」として、おそらく韓国よりもっと困難な思想革命の課題を背負って、孤独に日本の課題と使命を明らかにしようとしていた。梶村は、咸錫憲が語る韓国民衆の「弱肉強食の世界を平和を第一の価値とする世界へと逆転させ、世界を救う世界的使命」<sup>88)</sup>に言及する。日本を含めた世界史的な課題の提示を見ながら、梶村は自身と日本社会に与えられた歴史の意味と使命を見たであろう。「日韓体制」の既得権を享受しながら、自己点検の契機を喪失して自分たちが直面している状況の意味と方向すら見失っている日本社会のなかで、孤独な戦いを展開していた梶村にとり、「意味としての歴史」論は、方法の次元を超えて深く体感され、共感できるメッ



セージであった。

読んでみると、それは、単なる「価値中立的」な事実の羅列とは次元の異なる「意味としての歴史」の領域があるという、端的な問題提起をはらんでいるように感じられた。<sup>89)</sup>

もちろん、梶村の歴史認識は、咸錫憲の「意味としての歴史」へと単に一元化されたのではなかった。歴史から意味を獲得するためには、自分が立っている位置を現実的・科学的に認識するための普遍的な「事実としての歴史」が支えていなければならないからである<sup>90)</sup>。主体性を重視した「意味としての歴史」は、同時期に民衆史に傾斜していった梶村の歴史叙述を基底部でつき動かしていた。だが同時に、梶村は「事実としての歴史」の観点から、叙述の彫琢をも忘れなかった。この2つの視点の緊張によってこそ、70年代以降の梶村の歴史研究はあっさり深められたのだと言えよう。

## む す び

梶村は生涯、歴史研究者と実践運動家としての人生を並行させた。二つの人生と実践を通じて、通常の歴史研究には見られない独特な研究と実践のスタイルが生まれた。普遍的な「事実としての歴史」と個性的な「意味としての歴史」の間の緊張関係を通じて科学的歴史が成立する<sup>91)</sup>という彼の晩年の歴史論は、彼の研究・人生の到達点の一端を垣間見せてくれる。1965年、梶村は日韓条約締結後の日韓関係の行方について、歴史研究者として責任意識を持って執拗に追跡すると宣言した<sup>92)</sup>。梶村の歴史研究と実践は、1960年代日本社会の植民地主義的な韓国（歴史）認識と対決するという姿勢から出発した。1970～80年代には「日韓体制」との思想的格闘を通じて、近代的世界構造の暴力の本性を如実に解き明かしていった。近代の暴力が植民地的関係を通じて露骨に現れる点から、「日韓体制」は植民地的近代そのものであったといえよう。

ところが、植民地的近代そのものである「日韓体制」は、加害者である日本にも、現在と未来に対する意味の喪失という、ある意味では被害者以上に甚大な思想的打撃を与えた。こうした状況のただなかであって、梶村は「日韓体制」の根本的な克服を模索した。明治維新以来の近代日本百年を全否定し、先進国日本の既得権を放棄して生き方を根本的に変えるよう語気強く叫んだのはそのためである。

その叫びは、人間の根源的な欲望との対決でもあった。逃れ難い世界構造であり、克服し難い現実だったかもしれない。当時、唯一の対抗的思考体系であったマルクス主義すらも頼るべき存在ではなかった。そうした状況のなかで、「ひとりの歎息で反省」であり、友に対する「慰めであり励まし」であり、さらには「われわれの祈りであり信仰」であって歴史研究ではない<sup>93)</sup> 咸錫憲の歴史哲学と梶村の出会いが成し遂げられたのである。

韓国を通じて日本の問題を見る梶村の視角を今日に活かすならば、それは日本に限らない普遍的な問題意識としてわれわれに迫ってくる。1970～80年代の当時とは比較にならないほど、政治・経済・社会・文化すべての面から国際化された今日、日本のみならず韓国社会もまた、自己の繁栄の基盤がどのように維持されているかをどれほど自覚できているだろうか。自己省察の契機に配慮しながら、自らが置かれている位置が持つ「意味」を探し求めているだろうか。今日、韓国的な生き方は梶村の批判に耐えることができるのか。梶村が日本社会に投げかけた問いは、現在の韓国社会にも向けられているといえるのではないか。

#### 注

- 1) 梶村秀樹 (1969)「日本における朝鮮研究」『アジア経済』第10巻第6・7合併号, 原題「朝鮮」, (1993)『梶村秀樹著作集』第2巻, 明石書店, 所収, pp.88-89。以下, 著作集収録文献については, 著作集掲載の該当頁を示す。
- 2) たとえば当時, 日本近代史家の遠山茂樹は, 植民地支配を通じて形成された韓国に対する日本の蔑視感情が, 中国に対する感情よりはるかに根が深いため, アジアに対する植民地主義的な視角を克服するためには, 日本国民の対韓国認識の変革が緊要であると指摘している(遠山茂樹(1963)「朝鮮にたいする民族的偏見について」『歴史評論』第152号)。
- 3) 米谷匡史(2004)「アジア連帯論のコンテクスト——誰が誰に語るアジア連帯なのか」『理戦』第76号, pp.124-127。
- 4) 梶村秀樹(1970)「排外主義克服のための朝鮮史」青年アジア研究会の研究講座「日本・朝鮮・中国」の第1期の講演記録に加筆したもの, (1992)『梶村秀樹著作集』第1巻, 明石書店, 所収, pp.35-37。
- 5) 福沢が説いた政府主導による効率的な近代化論については, ひろたまさき(1972)「福沢論吉における第三の転回」『思想』第580号, を参照。
- 6) 朝鮮史研究会(1959)「日本の学会」『朝鮮史研究会会報』第1号, p.3。
- 7) 日本朝鮮研究所発足の背景と同所の植民地主義に対する問題意識については, 和田春樹・高崎宗司(2005)『検証日朝関係60年史』明石書店, 板垣竜太(2010)「日韓会談反対運動と植民地支配責任論」『思想』第1029号を参照。
- 8) 並木真人(1990)「戦後日本における朝鮮近代史研究の現段階——『内在的發展論』再考」

『歴史評論』第482号, p.18。

- 9) 1960年代の韓国・北朝鮮・日本における朝鮮史研究の「内在的發展論」の展開と相互の差異, および梶村の脱植民地主義的・近代批判的な歴史認識の一端については, 姜元鳳 (2012) 「一九六〇年代梶村秀樹の朝鮮史認識——戦後朝鮮史研究における内在的發展論の展開と分岐」『史海』東京学芸大学史学会, 第59号を参照されたい。
- 10) 藤森一清 (1975) (梶村秀樹の筆名, 以下同様) 「日韓条約体制一〇年の帰結——日韓体制の軌跡と変革の視座」『破防法研究』第24号。
- 11) 梶村秀樹 (1964) 「『不正蓄財処理問題』と南朝鮮の隷属的独占資本」『朝鮮研究月報』第26・27合併号, 同 (1964) 「『不正蓄財処理問題』と南朝鮮の隷属的独占資本《2》」『朝鮮研究月報』第31号, 同 (1965) 「『日韓経済協力』の本質」『歴史学研究月報』第70号, 吉永長生 (1966) (梶村秀樹の筆名, 以下同様) 「南朝鮮からの『労働力導入』問題について」『朝鮮研究』第48号, 同 (1966) 「日韓経済関係／従属経済関係へ進む／政治的介入の深化へ」『東京大学新聞』4月25日, 同 (1966) 「対韓経済進出の具体化状況」『朝鮮研究』第50号, 同 (1967) 「朴政権の経済政策の意味するもの——韓国『高度成長』の問題点」『朝鮮研究』第66号参照。
- 12) 吉永長生 (1967) 「韓国経済の構造と現局面」『国際問題』第88号, 日本国際問題研究所, p.26。
- 13) 藤森一清 (1975) 「朴政権の価値体系と韓国の民衆」『情況』第78号, pp.11-12。
- 14) 同上 p.13。
- 15) 同上 p.9。
- 16) 同上 p.5。
- 17) 同上 p.6。
- 18) 梶村秀樹 (1977) 『朝鮮史——その発展』講談社現代新書, pp.110-124 参照。
- 19) 梶村秀樹 (1976) 「日韓体制の再検討のために」『季刊 三千里』第7号, (1993) 『梶村秀樹著作集』第5巻, 明石書店, 所収, p.122。
- 20) 藤森前掲「朴政権の価値体系と韓国の民衆」p.9。
- 21) 当時, 国立映画制作所が「八道江山」(1967年), 「続 八道江山」(1968年)を制作・上映し, 後に「明日の八道江山」(1971年)も制作された。それらを通じて, 韓国の経済発展, 輸出伸張, ベトナム派兵など当時の朴政権の業績が, 劇的興味をともなって大々的に宣伝された。
- 22) 桜井浩・梶村秀樹 (1971) 「南朝鮮民衆の意識と行動」『朝鮮研究』第105号, pp.10-11。
- 23) 藤森前掲「朴政権の価値体系と韓国の民衆」pp.8-9。
- 24) 同上 p.13。
- 25) 藤森一清 (1977) 「韓国・朴体制の光と影——朴政権『見直し』論の移ろい」『破防法研究』第32号, p.42。
- 26) 当時の梶村を始めとする「日本朝鮮研究所」の植民地主義や朝鮮近現代史に関する認識については, 安藤彦太郎・寺尾五郎・宮田節子・吉岡吉典 (1964) 『日・朝・中三国人民連帯

の歴史と理論』日本朝鮮研究所を参照。

- 27) 和田春樹 (2006) 『ある戦後精神の形成——1938～1965』岩波書店, p.346。
- 28) 梶村前掲「排外主義克服のための朝鮮史」p.63。
- 29) 金嬉老事件とは、1968年2月、在日朝鮮人金嬉老が暴力団員2人を射殺した後、静岡県の温泉旅館で十数人を人質にしながら、日本社会と国家を抑圧者として告発した事件。梶村は「金嬉老公判対策委員会」に参加して、在日朝鮮人に対する差別問題を日本社会に提起した。
- 30) 梶村秀樹 (1974) 「朝鮮史研究の方法をめぐって」神奈川大学『自主講座朝鮮論』第4号, (1993) 『梶村秀樹著作集』第2巻, 所収, pp.122-125。
- 31) 梶村秀樹 (1971) 「八・一五以後の朝鮮人民」青年アジア研究会の研究講座「日本・朝鮮・中国」第1期の講演記録, (1976) 『破防法研究』第25, 26, 27号に連載, (1993) 『梶村秀樹著作集』第5巻, 所収, p.13。
- 32) 吉永長生 (1971) 「全泰老氏の焼身自殺の意味は何か?」『朝鮮研究』第103号, pp.16-17。
- 33) 藤森前掲「朴政権の価値体系と韓国の民衆」pp.11-12。
- 34) 同上 p.12。
- 35) 吉永長生 (1985) 「『日韓条約』二十年を考える」『季刊クライシス』第24号, p.69。
- 36) 吉永長生 (1975) 「南朝鮮の民主回復闘争」『朝鮮研究』第146号, pp.8-9。
- 37) 吉永長生 (1985) 「日本の対韓政策と民衆意識」『新地平』第127号, p.17。
- 38) 吉永長生 (1987) 「新局面きりひらいた韓国民衆運動」『季刊 世界から』第29号, p.10。
- 39) 梶村秀樹 (1988) 「80年代韓国の労働経済と労働政策——労働争議同時多発の背景」『経済貿易研究』第14号, 神奈川大学経済貿易研究所, p.101。
- 40) 梶村前掲「排外主義克服のための朝鮮史」pp.59-60。
- 41) 同上 p.18。
- 42) 梶村秀樹 (1966) 「朝鮮近代史と金玉均の評価」『思想』第510号, (1993) 『梶村秀樹著作集』第2巻, 所収を参照。
- 43) 呉知泳 (梶村秀樹訳注) (1970) 『東学史——朝鮮民衆運動の記録』平凡社 (東洋文庫174), 梶村の解説は (1993) 『梶村秀樹著作集』第4巻, 所収, p.95。
- 44) 藤森前掲「韓国・朴体制の光と影」p.39。
- 45) 吉永前掲「日本の対韓政策と民衆意識」p.19。
- 46) 梶村前掲「排外主義克服のための朝鮮史」p.46。
- 47) 梶村による、1960年代の北朝鮮における歴史研究や個人崇拜に対する批判的な視角については、前掲 姜元鳳 (2012) 「一九六〇年代梶村秀樹の朝鮮史認識——戦後朝鮮史研究における内在的発展論の展開と分岐」を参照されたい。
- 48) 谷浦孝雄 (1978) 「朝鮮民主主義人民共和国」『発展途上国研究——70年代日本における成果と課題』アジア経済研究所, pp.14-15。
- 49) 梶村秀樹 (1976) 「私の読んだ三十冊の本」『思想の科学』第59号, p.31。
- 50) 梶村秀樹 (1971) 「朝鮮民族解放闘争史と国際共産主義運動」青年アジア研究会の研究講座

「日本・朝鮮・中国」の第1期の講演記録, (1993)『梶村秀樹著作集』第4巻, 所収, pp.19-20。「…つまり民族的責任の観点ぬきに, 日本人であるわれわれが単に客観主義的に歴史を語るわけにはいかない…現在の北の体制をなりたたしめているのは, 戦前の日本帝国主義の歴史と, 更に戦後の南を成り立たせている体制, その一環としての日本帝国主義の再進出, といった状況であり, それを強いている責任をぬきにしては北の内部の様々な問題を論じえないはずです。…排外主義克服の課題と「一国社会主義批判」的視点…二つを主体的に止揚する問題意識を絶えずもちながら, 歴史や現状に対していかねばならない…」

- 51) 吉永前掲「全泰壹氏の焼身自殺の意味は何か?」p.19。
- 52) 同上。
- 53) 藤森前掲「朴政権の価値体系と韓国の民衆」p.13。
- 54) 同上。
- 55) 吉永長生 (1974)「ベトナム派兵の傷痕」『朝鮮研究』第139号, (1993)『梶村秀樹著作集』第5巻, 所収, pp.289-290。
- 56) 同上 p.291。
- 57) 同上 p.316。
- 58) 藤森前掲「日韓条約体制一〇年の帰結——日韓体制の軌跡と変革の視座」pp.26-27。
- 59) 同上 p.28。
- 60) 梶村前掲「日韓体制の再検討のために」p.131。
- 61) 内海愛子・谷浦孝雄・三満照敏・吉永長生 (1978)「〈座談会〉韓国経済の「脅威」を論ず」『朝鮮研究』第183号, pp.21-22。
- 62) 日韓関係および日本に対する金芝河の批判については, 「櫻賊歌」「冀氏物語」「鎮惡鬼」(1975年『金芝河全集』漢陽社)などの詩を参照。
- 63) 藤森前掲「韓国・朴体制の光と影」p.44。
- 64) 梶村秀樹 (1987)「韓国民衆運動の歩みと展望」和田春樹・梶村秀樹『「朝鮮問題」学習・研究シリーズ』第31・32合併号, 朝鮮問題懇談会, p.72。
- 65) 吉永前掲「日本の対韓政策と民衆意識」p.18。
- 66) 吉永前掲『「日韓条約」二十年を考える』p.72。
- 67) 同上 p.73。
- 68) 梶村秀樹 (1985)「定住外国人としての在日朝鮮人」『思想』第734号, (1993)『梶村秀樹著作集』第6巻, 所収, pp.26-27。
- 69) 同上 p.27。
- 70) 同上 p.30。
- 71) 梶村秀樹 (1985)「歴史の発展は幻想だろうか (インタビュー)」菅孝行編『モグラ叩き時代のマルキシズム』現代企画室, pp.108-109。
- 72) 同上 p.117。
- 73) 梶村秀樹 (1977)「申采浩の啓蒙思想」『季刊 三千里』第9号, pp.54-55。
- 74) 梶村秀樹 (1969)「申采浩の歴史学——近代朝鮮史学史論ノート」『思想』第537号, p.20。



30。

- 75) 梶村秀樹 (1977) 「日本帝国主義の問題——朝鮮からみた日本帝国主義」『岩波講座 日本歴史 24』岩波書店, (1993) 『梶村秀樹著作集』第2巻, 所収, p.306。
- 76) 梶村前掲 「朝鮮史研究の方法をめぐって」 p.117。
- 77) 梶村前掲 「日本帝国主義の問題」 pp.315-322。
- 78) 梶村秀樹 (1984) 「歴史と文学——朝鮮史の場合」『歴史評論』第409号, (1993) 『梶村秀樹著作集』第2巻, 所収, p.365。
- 79) 宮嶋博史 (1976) 「韓国における『民族史学』について」『歴史学研究』第439号, p.14。
- 80) 梶村秀樹 (1984) 「語りはじめた労働者たち」『祖国統一新報』第370・371号, 6月5日・15日掲載, (1993) 『梶村秀樹著作集』第5巻, 所収, p.337。
- 81) 咸錫憲 (金学鉉訳) (1980) 『苦難の韓国民衆史——意味から見た韓国歴史』新教出版社。
- 82) 함석헌 (咸錫憲) (1960) 『성서적 입장에서 본 한국역사 (聖書的立場でみる韓国歴史)』新生館参照。
- 83) 梶村前掲 「日本帝国主義の問題」 p.326。
- 84) 同上 pp.326-327。
- 85) 梶村秀樹 (1980) 「苦難を背負う——咸錫憲氏の『苦難の韓国民衆史』によせて」『福音と世界』第35巻第10号, p.50。
- 86) 同上。
- 87) 同上 p.49。
- 88) 同上 pp.49-50。
- 89) 梶村前掲 「歴史と文学」 p.362。
- 90) 同上 pp.361-364。
- 91) 同上 p.364。
- 92) 梶村秀樹 (1966) 「日韓条約のゆくえを追跡します」『歴史評論』第186号, (1993) 『梶村秀樹著作集』第5巻, 所収, p.107。
- 93) 함석헌 (咸錫憲) 前掲 머리말 (序文) p.2。